感覚的快楽説は卑俗性批判に応答できるか――クリスプの快楽説の検討
Can Sensory Hedonism Address the Base Pleasure Objection?
：An Examination of Crisp's Hedonism

笹滉介

Abstract

A classical and significant criticism of axiological hedonism is known as “the base pleasure objection.” In response, some hedonists have adopted qualitative hedonism. However, qualitative hedonism encounters Moore’s criticism of inconsistency. While attitudinal hedonism, as proposed by Fred Feldman, can circumvent this criticism, relying exclusively on this approach limits our theoretical options for understanding the nature of pleasure. Therefore, it is crucial to demonstrate that sensory hedonism can address the base pleasure objection while also avoiding Moore’s criticism. To explore this possibility, this paper analyzes Roger Crisp's version of hedonism.

(1) 研究テーマ

本稿の主題は価値論的快楽説（axiological hedonism）、すなわち福利論における快楽説である。価値論的快楽説（以下、快楽説）は、「すべての快楽が、そして快楽だけが賢慮的価値を持つ」という主張にコミットする立場である。「賢慮的価値」（prudential value）とは、「ある人にとっての良さ」(the good for a person)のことである（Tiberius 2015, 1）。厳密には、ここで問題になるのは単なる良さではなく、終局的な（final）良さである。あるものが終局的に良いとは、それがそれ自身のゆえに（for its own sake）良いということであり、他のもののゆえに（for other’s sake）良いのではないということである。

快楽説はその直観的なわかりやすさが魅力の 1 つではあるが、同時に、ときに反直観的な含意をもたらすという点で様々な批判にさらされている。本稿ではそのうち、卑俗性批判と呼ばれる批判を扱う [1]。卑俗性批判は快楽説に対する古典的で主要な批判の 1 つである。古典的な快楽説によれば、快楽の賢慮的価値は、快楽の量のみによって、すなわち快楽の強さと持続時間のみによって決まる。これはつまり、2 つの快楽の強さと持続時間が同じであれば、必ず、両者の賢慮的価値は等しいということを意味する。したがって、

例えば、週刊誌のゴシップ記事を読むことから得られる快楽と哲学の古典を読むことから得られる快楽は、両者の強さと持続時間が同じである限り、必ず、同じ大きさの賢慮的価値を持つことになる。これに対し、卑俗性批判は、卑俗な快楽と高貴な快楽とでは、両者の快楽としての強さと持続時間が同じであれば、必ず、後者の方が前者よりも大きな賢慮的価値を持つと主張する[2]。この卑俗性批判の主張が正しければ、偽である命題を結論として導出する古典的な快楽説は誤りであるということになる。

これに対する応答としてよく知られているのが快楽に質の区別を認める J. S. ミルの質的快楽説（qualitative hedonism）である[3]。しかし、ミルの質的快楽説には数多くの批判が提出されている。そのうち最も重要な批判の 1 つが、G. E. ムーアによる不整合性批判である（Moore 1903[2000] ）。ムーアによる批判に瑕疵がない限りにおいて、質的快楽説によって卑俗性批判への応答を試みる快楽説論者はムーアによる批判を回避しなければならない。

この批判に対する応答としては、F. フェルドマンによる態度的快楽説（attitudinal hedonism）が知られている（Feldman 2004）。態度的快楽説とは、快楽の本性を命題的態度として理解する見解（命題的態度説）を採用する快楽説のことであり、この点で快楽の本性をもっぱら感覚として理解してきた古典的な快楽説とは異なる。命題的態度とは命題を対象とする心的態度のことであり、信念や欲求などがその例となる。フェルドマンによれば、事態を楽しむこと、喜ぶこと、嬉しく思うことが、すなわちその事態から命題的態度としての快楽を得ることである。フェルドマンが主張するように、確かに態度的快楽説を採用するとムーアによる批判を回避することが可能となる（Feldman 2004, Ch. 4）。しかし、もし仮に、態度的快楽説でなければ卑俗性批判に応答できないのだとすれば、快楽の本性をいかに理解するかという論点についてのわれわれの理論的選択肢が命題的態度説に制限されることとなる。これは快楽説を擁護するわれわれとしては望ましくない。

よって、われわれは、快楽の本性を感覚として理解する見解（感覚説）を採用する快楽説（感覚的快楽説）からも卑俗性批判に応答することができることを示す必要がある。そこで、本稿では R. クリスプの快楽説に注目したい。クリスプは Crisp (2006)の第 4 章において感覚的快楽説の立場から卑俗性批判に応答するための独創的な議論を展開している。本稿は、クリスプの快楽説が、快楽の本性を感覚として捉えた上で、ムーアによる批判を回避しながら、卑俗性批判に応答することができるかを検討することを目的とする。

(2) 研究の背景・先行研究

卑俗性批判が古典的な快楽説を論駁する次第は以下の論証を見ると理解できる（Fletcher 2016, 21-22; 成田 2021, 54-55）。なお、この論証は強い前提(S-2)に依拠しているため、便宜上、卑俗性批判 S と呼称する。弱い前提に依拠する卑俗性批判――これを卑俗性批判 W と呼称する――については後に第 3 節で見る。

卑俗性批判 S
(S-1)古典的な快楽説が正しければ、卑俗な快楽と高貴な快楽とでは、それらの強さと持続時間が同じであれば、必ず、両者の賢慮的価値は同じになる
(S-2)卑俗な快楽と高貴な快楽とでは、それらの強さと持続時間が同じであれば、必ず、後者の方が前者よりも大きな賢慮的価値を持つ
(S-3)古典的な快楽説は正しくない ∵(S-1)と(S-2)

これは論理的に妥当な推論となっているので、S-2 を受け入れる快楽説論者は、S-2 を含意し、S-1 が当てはまらない快楽説を提唱する必要がある。

よく知られているように、ミルは快楽に質の区別を導入することで卑俗性批判への応答を試みた（Mill 1871, Ch. 2）。その際、ミルは快楽の価値を左右する要素として、量に対する優越を質に認めているが、卑俗性批判に応答するだけであれば質に優越を認める必要は特にない。そこで、ここではより単純な質的快楽説として、G. フレッチャーの質的快楽説を見ておきたい。

フレッチャーが提唱する質的快楽説――本稿ではこれを FQH と呼称する――は、「快楽の賢慮的価値の大きさは、快楽の強さと持続時間と質の関数である」という主張にコミットする（Fletcher 2008, 466）[4]。FQH は卑俗性批判 S によっては論駁されない。なぜなら、FQH では、快楽の強さと持続時間だけでなく、質も快楽の価値を左右するので、質の低い快楽を卑俗な快楽に、質の高い快楽を高貴な快楽に対応させると、S-2 が含意されるからである。

それでは、FQH はムーアによる不整合性批判を回避しているだろうか。まずはムーアによる批判の中身をごく簡単に確認する（Moore 1903[2000], §47-48）[5]。ムーアによれば、ミルの快楽説は快楽説である以上、快楽だけが賢慮的価値を持つという一元論的見解にコミットしている。他方で、ミルの快楽説は快楽の質の違いが快楽の価値を左右することを認めることによって、快楽だけでなく、快楽を生み出すものも賢慮的価値を持つという見解にコミットすることになる。この 2 つの見解は両立不可能なので、ミルの質的快楽説は不整合に陥っている。

このうち後者の見解にミルの質的快楽説がコミットしているというムーアの主張については、さらに説明が必要だろう。ミルは例えば、質的快楽説を唱える中で、「感覚的な耽溺」（sensual indulgence）を低級快楽としている（Mill 1871, p. 14）が、ムーアはこれについて、「感覚的な耽溺」とは、ある感覚の一定の興奮と、その興奮によって引き起こされる快楽が一緒になったものであると述べている。このとき、「感覚的な耽溺」という快楽の質の要素を担っているのは「ある感覚の一定の興奮」の部分であって、快楽そのものではない。よって、質的快楽説が主張するように、「快楽」の質がその価値を左右すると考えるためには、そこでの「快楽」は快楽とそれを生み出すものとの複合物であると考えるしかない。快楽説が、快楽そのものとそれを生み出すものとの複合物が賢慮的価値を持つという見解にコミットするならば、快楽に加えて快楽を生み出すものもまた賢慮的価値を持つということになる。

これに対して、たとえミルの質的快楽説において快楽の質が快楽そのものではなく快楽を生み出したものに帰属されるのだとしても、快楽を生み出したものがどのようなものであるかということを快楽そのものの外在的特徴として扱えば、快楽そのものだけが賢慮的価値を持つという主張を維持できると反論されるかもしれない。しかし、この対処はうまくいかない。ムーアによるこの一連の議論は、あるものの内在的価値（intrinsic value）はそのものの外在的特徴によっては左右されえないというムーアの価値論上の見解（Moore 1903[2000], p. 22）によって支えられている（cf. Feldman 2004, 71-73）[6]。この価値論上の見解のもとでは、仮に快楽を生み出したものが何であるかということを快楽そのものの外在的特徴として扱ったとしても、それが快楽の内在的価値を左右することはあり得ない。したがって、ミルの質的快楽説における「快楽」とは、快楽そのものと快楽を生み出すものとの複合物であると考えざるを得ない。ムーアによれば、ミルの質的快楽説はこのようにして価値多元論にコミットすることで不整合に陥る[7]。

以上を踏まえてFQHがムーアによる批判を回避できているかを確認する。ムーアによる不整合性批判に対するフレッチャーの応答はシンプルである（Fletcher 2008, 465-467）。それによれば、ムーアが批判するミルの質的快楽説とは異なり、「すべての快楽が、そしてそれだけが賢慮的価値を持つ」という主張にコミットする FQH においては賢慮的価値を持つのは快楽だけなのだから、この点で FQH は一元的な形態をしており、よって価値多元論にコミットしているという批判は当たらない。

しかし、フレッチャーのこの応答には問題がある。上で見た通り、ムーアによる不整合性批判は、質的快楽説がそれだけが賢慮的価値を持つと述べる

ところの「快楽」が、実は快楽そのものと快楽を生み出すものとの複合物であり、それゆえ、質的快楽説は、快楽だけでなく快楽を生み出すものもまた賢慮的価値を持つという主張にコミットすることになってしまい、価値多元論にコミットしているという批判だった。この批判を突き崩すための議論をフレッチャーは提示していない。FQH が、快楽だけが賢慮的価値を持つという一元論的な主張を行っているのは事実であるが、その一元性は表面的な一元性に過ぎない。ムーアが主張しているのは、あるものの内在的価値はそのものの外在的特徴によっては左右されえないという価値論上の見解のもとでは、ミルが主張するような質的快楽説は、その構造上、上で述べたような理路によって価値多元論にコミットせざるを得ないということである。この主張については、それが依拠している理路が正しい限り、FQH にも当てはまる。したがって、フレッチャーによる質的快楽説の整合性の擁護は、ムーアによる不整合性批判の核心がムーアの価値論上の見解にあることを見誤ったものであると言わざるを得ない。

(3) 筆者の主張

この節ではクリスプの快楽説を取り上げ、それが快楽の本性を感覚として捉えた上で、ムーアによる批判を回避しながら、卑俗性批判に応答することができるかを検討する。

まず、クリスプの定義によれば、快楽説は、賢慮的価値を持つのは人生における快い経験であるという主張にコミットする立場である（Crisp 2006, 102）。つまり、クリスプの快楽説――これを CH と呼称する――のもとで賢慮的価値を持つのは快楽そのものではなく、快い経験、すなわち快楽経験である。そして、クリスプは快楽の本性について内在主義を採用する（Crisp 2006, 103-111）。クリスプによれば、内在主義とは、快楽経験の共通点は、それらの肯定的な情調（feeling tone）であるという立場である。快楽を「肯定的な情調」として捉えている点において、クリスプは伝統的な意味での感覚説に立っていると考えてよい（cf. 成田 2021, 65-69）。

それでは、クリスプは卑俗性批判に応答するためにどのような議論を展開しているのだろうか。CH においては、ある快楽経験の賢慮的価値の大きさはその経験の快さのみによって決まる（Crisp 2006, 102-103; 111-117）。そして、ある快楽経験の快さはその経験の様々な質（quality）によって左右される（Crisp 2006, 115-116）[8]。それらの質には、まず強さと持続時間が含まれるが、クリスプはそれら以外の様々な質もまた快楽経験の快さを左右すると述べる。このことを示す例として、クリスプは、冷えたレモネードを 1 杯

飲むという快楽経験と、J. オースティンの『高慢と偏見』を初めて読むという快楽経験を比較し、後者のほうが快いと考えるのが理にかなっていると主張する（Crisp 2006, 115）。クリスプによれば、『高慢と偏見』の読書経験が快いのは、それに含まれる機知、構文の美しさ、登場人物の描写の精巧さのおかげであり、これらの質の欠落は、仮にレモネードを飲む経験をどれだけ引きのばしても埋め合わせることができない。

以上のような特徴を備えた CH にはムーアによる不整合性批判は当たらない。なぜなら、CH においては、快楽経験の内在的価値は快楽経験の快さという内在的特徴のみによって決まるからであり、さらには快楽経験の快さも、快楽経験の強さ、持続時間、その他の経験の質といった、快楽経験の内在的特徴のみによって規定されているからである。

それでは、CH は肝心の卑俗性批判 S に応答できるのだろうか。結論から述べれば、クリスプの見立てに反し、CH による応答はうまくいかない（cf. 成田 2021, Ch. 3）。なぜなら、CH については、(S-1**)「CH が正しければ、卑俗な快楽経験と高貴な快楽経験とでは、それらの強さと持続時間が同じであれば、必ず、後者の方が前者よりも大きな賢慮的価値を持つ」が成り立たないからである。なぜかというと、CH のもとでは、卑俗な快楽経験と高貴な快楽経験とでは、それらの強さと持続時間が同じであるときにどちらがより大きな賢慮的価値を持つかは、その他の経験の質の如何に応じる仕方でそれぞれがどれだけ快く感じられるかによって左右されるが、卑俗な快楽経験よりも高貴な快楽経験のほうが必ずより快く感じられるとは限らないからである。したがって CH は卑俗性批判 S には応答できない。

しかし、ここで卑俗性批判 S 自体の妥当性を疑うことも可能である。特に S-2 は強い主張となっており、これに反する直観を持つ人も多いだろう。卑俗性批判を行う側はこうした疑義に対して S-2 をより弱い主張 W-2 に置換したうえで批判を再定式化することが可能である。それが第 2 節で言及した卑俗性批判 W である。卑俗性批判 W は以下の論証によって構成される。

卑俗性批判 W

(W-1)古典的な快楽説が正しければ、卑俗な快楽経験と高貴な快楽経験は、その強さと持続時間が同じであれば、必ず、両者の賢慮的価値は同じになる

(W-2)卑俗な快楽経験と高貴な快楽経験は、その強さと持続時間が同じであっても、必ず、両者の賢慮的価値は同じになる、とは限らない

(W-3)古典的な快楽説は誤りである　∵(W-1)と(W-2)

卑俗性批判 W は卑俗性批判 S と同様、古典的な快楽説を論駁する能力を持っている。また、W-2 は S-2 よりも弱い主張となっているので、それだけ卑俗性批判 W のほうが卑俗性批判 S よりも論証として堅牢である。

それでは、CH は卑俗性批判 W に対しては応答できるだろうか。結論を述べれば、応答可能である。なぜなら、CH は W-2 を含意するからである。CH においては、快楽経験の賢慮的価値は、経験の強さと持続時間だけでなく、ほかの経験の質によっても左右されるので、強さと持続時間が等しいというだけで 2 つの快楽の賢慮的価値が同じになるとは限らない。

結論は以下である。クリスプの快楽説は快楽の本性について感覚説に立ちながらムーアによる不整合性批判を回避しているが、卑俗性批判 S に対しては応答能力を持たない。ただし、卑俗性批判 W に対する応答能力は有する。

(4) 今後の展望

以上より、CR は卑俗性批判 S に対する応答能力に問題を抱えることがわかった。他方で卑俗性批判 S 自体の妥当性には疑義が残る。特に、S-2 については、少なくとも一見して（prima facie に）理にかなっていない（unreasonable）とは思われない CH が S-2 と矛盾する命題である W-2 を含意することにも示されている通り、全く自明ではないので、卑俗性批判 S を行う側は S-2 を支持する議論を用意する必要があるだろう。そして卑俗性批判への応答を試みるわれわれは、CR を擁護しながら、S-2 を支持する議論に対して反論を行うことによって応答を行うことが可能である。

CR の革新的な点は、快楽の本性についての感覚説に立ちながら、ムーアによる不整合性批判を回避できている点であり、この点で他に類を見ない快楽説となっている。CR は卑俗性批判 W に対する応答能力は有しているため、もし福利の理論として CR を擁護するのであれば、S-2 が疑わしいことを示すことで卑俗性批判 S 自体の妥当性に疑義を呈する必要があるだろう。もしそれがうまくいき、卑俗性批判 S 自体に瑕疵があることがわかれば、快楽説は快楽の本性について感覚説に立つか命題的態度説に立つかにかかわらず卑俗性批判に応答できることになる。これにより、福利の理論としての快楽説を擁護する試みはさらに前進することになるだろう。

注

[1]「卑俗性批判」という名称は成田（2021）に由来する。

[2] 卑俗性批判には、「卑俗な快楽は賢慮的価値を一切持たない」と主張する

類型も存在するが、本稿では扱わない（Fletcher 2016, 19-21）。

[3] しばしば見逃される点だが、ミルの快楽説は福利の理論としての快楽説（axiological hedonism）ではなく、善の理論としての快楽説である（Mill 1871, Ch. 2）。しかし、本稿は福利論を主題とするから、ミルの主張を適宜福利の理論としての快楽説についての主張として読み替えながら論述を行う。後述するムーアとフレッチャーに関しても同様である。

[4] 一部、表現を本稿の用語法に合わせている。フレッチャーの他の引用についても同様である。

[5] 本稿はムーアによる不整合性批判を論証の形で厳密に再構成することも批判の成否を検討することも目的としない。それらの作業は別稿に譲る。

[6] ここで内在的価値についての価値論上の見解が登場するのは、ムーアが議論しているのが善の理論としての快楽説についてであり、かつムーアが善と内在的価値を等置しているという事情が背景にある。よって、ムーアの批判が福利の理論としての質的快楽説に妥当するには、少なくとも、福利が内在的価値であるということが言えなければならないが、本稿はこの点については立ち入らない。

[7] ミルの快楽説については様々な解釈の余地があり、ムーアの批判を回避できるような解釈もありうるが、本稿ではこの点には立ち入らない。

[8] 経験の質（quality）についてクリスプはほとんど立ち入って論じていないため、クリスプの叙述からはそれが何であるかはあまり判然としないが、少なくともクリスプ自身は経験の快さを左右するような経験に備わる性質一般を経験の質として理解しているように読める（Crisp 2006, Ch. 4）。

(5) 参考文献

Crisp, Roger. 2006. *Reasons and the Good.* Clarendon Press.

Feldman, F. 2004. *Pleasure and the Good Life: Concerning the Nature, Varieties, and Plausibility of Hedonism*. Oxford University Press.

Fletcher, Guy. 2008. “The Consistency of Qualitative Hedonism and the Value of (at Least Some) Malicious Pleasures.” *Utilitas* 20 (4): 462–71.

Fletcher, Guy. 2016. *The Philosophy of Well-Being: An Introduction.* London, England: Routledge.

Mill, J. S. (1871). *Utilitarianism*. Longmams, Green, Reader, and Dyer.

Moore, George Edward. 1903[2000]. *Principia Ethica.* Cambridge University Press.

Tiberius, Valerie, 2015. “Prudential Value.” In Iwao Hirose and Jonas

Olson. *The Oxford Handbook of Value Theory*. Oxford University Press.
成田和信. 2021. 『幸福をめぐる哲学』. 勁草書房.

（東京大学）